

銅賞

私と福祉の関わり

横須賀市立坂本中学校 三年 辻 杏奈

私の家の近くには、パレットという障害者支援センターがあります。障害者の作品の展示販売や、生活支援ヘルパーの派遣、ボランティアの受付、就職の相談などさまざまな支援活動を行っています。障害をもつ人たちも多く出入りしています。先日、センターの前を通った時「こんにちはー」ととても大きな声で呼びかけられました。見ると身体のかなりの大きな男の人でした。余りにも大きな声と突然の出来事に驚いてしまい、どう対応していいかわからず、そのまま逃げるように家に帰ってきました。家に着いてから「せっかく挨拶してくれたのにひどい態度をとってしまった。きつと傷つけてしまっただろうな」と申し訳ない気持ちになりました。このことがきっかけで障害者についての理解を深めたいと思い人権作文のテーマに決めました。

障害者とは、なんらかの原因によって長期にわたり日常生活または社会生活に相当な制限を受けざるを得ない人たちのことで、身体

障害者、精神障害者、知的障害者に大別されます。障害者の生活を  
守る法律には障害者福祉法があり、障害者の自立と社会経済活動へ  
の参加を促進するため、援助活動と必要な保護を行うことを目的と  
しています。自立と社会経済活動への参加とは、社会で働くという  
ことです。障害者雇用促進法により、民間企業および公的機関にお  
ける法定雇用率が定められており、平成二十二年度は民間・公的機  
関共に前年を上回る雇用が実現しました。しかし、障害の種類や程  
度によっては雇用が難しい場合もあり、働きたいという全ての障害  
者に対しての雇用機会が十分には与えられていないのが現状です。  
そのようななかで「友愛社会の理想である」として国会でも紹介さ  
れた企業があります。雑誌のインタビュー記事ですが、障害者を雇  
用することで起こりうる問題とその解決方法、雇用者や共に働く健  
常者はどのように障害者に接すればよいのか、そして福祉とは何か  
についてもよくわかる記事です。

神奈川県川崎市にある日本理化学工業は、一日に十万本ものチヨ  
ークを製造する国内シェア、三割のトップメーカーです。総従業員  
数七十四人のうち七割にあたる五十五人に知的障害があり、そのう  
ち二十六人が重度知的障害者です。営業や事務を健常者が担当し、

製造部門を障害者が担っています。同社の障害者雇用は五十年になります。現会長・当時の社長であった大山泰弘さんは「最初は同情から引き受けた」と言います。その頃知的障害者は精神薄弱と呼ばれ、何も理解できない可哀想な人だという認識が一般的でした。

大山さんもその一人で、養護施設の教師の「就職できないと一生施設に入ったままです。せめて働くという経験だけでもさせてあげたい」という強い願いで二人の女子の職業自習を許可しました。二人の女子は毎日、一生懸命に働いていました。働いている姿を見て大山さんは「なぜそこまでして働きたいのか。施設でのんびりと大事にされる方がいいのではないか。」と聞くと「人間の幸せは、人に愛されること、ほめられること、人の役に立つこと、人に必要とされることの四つです。愛されること以外の三つは社会で働いてこそ得られる幸せなのです。」と答えました。それを聞いた大山さんは心を打たれ、せめて一人でも多く雇用し「働く幸せ」を与えたいと積極的に雇用を進めました。

大山さんにインタビューし、福祉とは何かについて問われた大山さんは「私を含め、健常者はたんに障害者の面倒をみるのが福祉だと思いがちだけれど、それは思い違いです。人のために働くこと

で心が豊かになる。心の幸せがあつてこそその福祉なのです。日本国憲法には、すべての国民は勤労の義務を負うとあります。働く場所を提供することは国や企業の使命なのです」と答えた。私は、この言葉にとっても感動しました。

私は将来、福祉の仕事に携わりたいと考えています。弱者や困っている人たちを助けたいと思っているからです。でも今回、障害者福祉について調べてみて私の考えが間違っていたことに気づきました。私は、支援することは「自分が代わりにしてあげること」なのだと思っていたのです。本当の支援とは、相手の立場に立って「何をしたいのか、何をして欲しいのか。」というニーズを理解し、どうしたらそれらの実現が可能になるのかを考えること。そして、出来ない部分を手助けして継続的に出来るようにすること。何よりも一番大切なのは、相手の心に寄り添い励まし支えることなのだとわかりました。大山会長さんのおっしゃる「人のために一生懸命働くことで心が豊かになる」「心の幸せがあつてこそその福祉」という言葉を私自身の信念として、今後は地域のボランティア活動に積極的に参加し福祉に対する学習を深めていきたいです。